

# 自己学習力を育むカリキュラム開発研究 1 (小学校)

—基礎・基本の定着を図る学習指導—

新倉 美和子<sup>1</sup> 福士 和久<sup>1</sup> 三堀 仁<sup>1</sup> 安達 禎崇<sup>1</sup> 穂坂 明範<sup>2</sup>

子どもが生涯にわたって学び続けるための自己学習力を育むには、小学校において、基礎・基本の力を確実に身に付けさせるとともに、「学ぶことの楽しさ」を味わわせ、子どもの伸びようとする意欲を高め自ら学び続ける力を育てていくことが必要であると考えた。そこで、先行研究の調査等を行い、カリキュラムの開発を目指して各教科における自己学習力を育む学習のあり方を探った。

## はじめに

子どもたちの学ぶ意欲の低下が問題となっている。こうした状況の中で、学ぶ楽しさを味わわせて、自ら学び続ける力を育てることが重要であると考えます。

自ら学ぶためには、課題をとらえ情報を収集して自ら考え判断できるように、各教科の学習において基礎的・基本的な内容を習得することが大切であるにとらえている。そこで、基礎・基本の定着を図る学習指導に視点をおき、自己学習力を育む学習指導のあり方を探ることは必要であると考えます。

自己学習力は、子どもたちに身につけてほしい生きる力の一つであり、学校教育全体で育てる力である。そこで、本研究では、小学校における自己学習力を育むカリキュラムの考え方について考察し、その考え方をもとに、国語、算数、理科、生活、音楽における学習指導について考えることとした。

## 研究の内容

### 1 自己学習力を育むカリキュラム開発の考え方

まず、「自己学習力育成といった目標は、教科や総合的な学習等の目標の実現等を通してこそ実現可能」（加藤 2003 p20）ということを確認しておきたい。

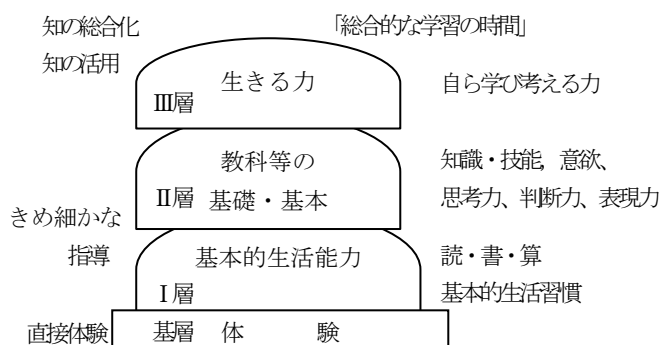
教師は、各教科をそれぞれ個別に考えるのではなく、学校のカリキュラム全体を見通し、広い視野に立って、目標の実現に向けて計画的に指導にあたり、その中で自己学習力の育成を目指すのである。

子どもにつけたい力を明確に示して目指す方向と指導の方法を全体計画に表し、教師が同じ目標に向かって子どもの学びを積み重ねていくようにしたい。そして、教科の目標の実現と「自己学習力の実現というもっと大きな願いとしての目標」（加藤 2003 p20）を意識した計画を考えることが必要である。

- 1 人材育成課 研修指導主事
- 2 研究開発課 研修指導主事

### 2 教科指導の取組の考え方

自己学習力は教科や「総合的な学習の時間」等、教育活動全体を通して育てるが、児島は「教科等の力こそが、生きる力を育てるために一層重視される総合的な学習の時間の武器になる」（児島 2004p. 15）と教科の重要性を述べており、自己学習力を育む上で各教科の基礎・基本の確実な定着は重要なことである。この考え方を児島は次のような図で説明する（第1図）。



児島邦宏 『生きる力』『確かな学力』の提唱と21世紀初頭の学校の役割』（『指導と評価』2004年4月号） p. 14

第1図 層的（重ね餅的）な学力観のイメージ図

また、加藤は、学習の過程で「学ぶことの楽しさ」を味わわせ、「もっと続けたい」「追究してみたい」と自分なりの目標をもてるようにすることが、自己学習力を育む上で大切であると述べている。

「学ぶことの楽しさ」は、それまで分からなかったことが分かり、できなかったことができるようになって、自分自身に自信がもて、可能性が広がってさらに伸びようとする意欲が高まっていくという過程で実感できるのではないだろうか。つまり、学習する過程で確かな学力が身に付くようにすることは重要である。

そこで、先行研究や事例を参考として、自己学習力を支える力となる各教科の基礎・基本の力を確実に身に付けさせ、子どもたちに「わかった」「できた」「もっとやってみよう」と実感させることができるような各教科の学習指導のあり方を考察した。

### 3 各教科の学習指導の考え方

#### (1) 国語

国語の力を培うことは、すべての学習を通して必要である。国語の学習指導では、各学年の目標や指導内容を十分に把握し、確実に身に付けるようにしたい。そのためには、個に応じた指導により、教科の基礎・基本の定着を着実に図ることが不可欠である。児童に、学ぶ楽しさを味わえるような場の設定や、教材・教具の開発を行いたい。特に、教科目標である「伝え合う力を高める」ことについては、人間関係が希薄化している現在、ますます重要になっている。他教科や「総合的な学習の時間」等との関連を考えて、カリキュラムを開発する必要がある。

#### (2) 算数

子どもが意欲的に学習に取り組めるように、算数的活動を通して、楽しくわかりやすい授業を目指す。そこで、「どのような体験を軸に展開するか」「何が分かり、何をできるようにするのか」「どんな数学的な見方、考え方を養うのか」等を明らかにして明確な目標を設定し、指導計画を作成する。算数の基礎・基本は単に知識・技能だけでなく意欲や思考力、身につけたことを生活に生かす力を含めたものととらえ、意欲を引き出す教材や活動の工夫、子どもにとって切実な問題の設定、実感を伴った理解が得られるような思考活動の重視等に配慮して指導を考える必要がある。

#### (3) 理科

理科における、自己学習力を育むためには、学ぶ意欲を高め、主体的な問題解決に取り組ませていくことが大切である。そのためには、知的好奇心を引き出し、先行経験と矛盾するような事象との出会いが不可欠である。そこから、見通しをもって予想を立て、検証のための観察・実験をおこない、結果を考察するという実感を伴った理解を図る一連の学習活動を教師の指導のもとに展開していくことになる。そのために、身近なものを使ったものづくり活動や自己評価の積み重ねなどに留意しながら、個に応じた指導と評価を実現できるようなカリキュラムの開発が重要となってくる。

#### (4) 生活科

生活科において自己学習力を育むことは、「自立への基礎を養う」という教科目標の「学習上の自立」を促すことを意味する。「学習上の自立」とは、自分にとって興味や関心、価値があると感じる学習活動に対して自分から進んで行い、そこで感じたことや考えたことを自分なりに表現できることである。そのための学習指導においては、身近な地域を学習の場とし、繰り返しかかわることができるような柔軟な指導計画を立て、子ども一人ひとりのよさを見取り、それを次の活動に生かすことが大切である。自分とのかかわりで学ぶ生活科においてはより一層個に応じた指導が求められる。

#### (5) 音楽

音楽科教育で大切なことは、どの子どもにも、生涯にわたって音楽を好み、いつでも自分のそばに音楽があることを喜びとする「心の芽」を育むことである。授業において、子どもたち一人ひとりが楽しく音楽にかかわり、音楽活動をする喜びを得られるようにすることが必要である。そのためには、子どもたちが多様で幅広い音楽と出会い、音楽と様々なかかわりをしながら、そのよさや美しさを感じ取ることができるような指導計画の作成と、友だちとともに音楽表現をつくり上げる等、音楽科教育ならではの学習活動を工夫し、発達段階及び個に応じて展開することが求められる。

### 4 基礎・基本の定着を図る学習指導

基礎・基本の確実な定着を図るには、計画的な指導が必要である。そこで、その教科の特質を理解して基礎・基本とは何かをおさえ、子どもの姿を想定して具体的な目標をたて、その実現に向けた学習活動を工夫することが求められる。

教師は、教科だけでなく、より広い視野で子どもの学びの広がりを見通しておき、子どもの思考の流れにそった指導を大切にしたい。また、基礎・基本を確実に身に付けさせるために、子どもの理解の状況を的確にとらえ、その子に応じた指導をすることが不可欠である。このことは、今後さらに研究を深めていく必要がある。

#### おわりに

今年度は、各教科間の情報交換を図りながら、基礎・基本の定着を図る学習指導に視点をあて、自己学習力を育むカリキュラム開発の考え方について、長期研修員とともに研究を進めた。このように、小学校教育全体を見通して研究することは、子どもの学びを考える上で有効である。今後さらに、カリキュラムを開発し、個に応じた指導を大切にしながら授業を実践し、その検証を通して研究を深めていきたいと考える。

#### 引用文献

- 加藤 明 2003 『評価規準づくりの基礎・基本 学力と成長を保障する教育方法』 明治図書 p. 20  
児島邦宏 2004 「『生きる力』『確かな学力』の提唱と21世紀初頭の学校の役割」(『指導と評価』 2004年10月号) pp. 14-15

#### 参考文献

- 文部省 2000 『小学校学習指導要領解説 国語編/算数編/理科編/生活編/音楽編』  
加藤 明 1997 『「生きる力」を育む算数科の授業づくり』 東京書籍